茜色の歌姫

第三部　有馬皇子の変

飛鳥時代の武人

蘇我赤兄臣、有馬皇子に語りて曰く、「天皇の治らす政事、三つの失あり。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚ること、一つ。長く渠水を穿りて、公糧を費やすこと。二つ。舟に石を載みて運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有馬皇子、（中略）欣然びて曰はく、「吾が年初めて兵を用ゐるべき時なり」

（中略）是の夜半に、赤兄、物部朴井連鮪を遣はして、（中略）有馬皇子を市経の家に囲む。
（中略）皇太子、親ら有馬皇子に問ひて曰はく、「何の故か謀叛けむとする」とのたまふ。
答へて曰さく、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」

（『日本書紀』巻第二十六）

春過ぎて夏来るらし　白妙の衣干したり　天の香具山

（『万葉集』巻第一）

第二章　狂心の渠幡

658

山田寺で有馬皇子らと会ってより三日の後。
大海人皇子は、貧しい身なりにやつし、大王のいます岡本宮に調を運ぶ壮丁の列のなかにいた。
月に一度、王族や豪族は、各々が治める地でとれる珍しい産物を、岡本宮に献じなければならない。大海人皇子は、伊勢から取り寄せた魚介を調ぐことになっている。
舎人の村国男依を先頭に、背に荷をかついだ十人の壮丁がつづく。
かつて、板蓋宮と呼ばれた王宮は、岡本宮と名を改めた。東西に1町半（約150メートル）、南北に二町（約180メートル）の高い塀に囲まれた岡本宮は、さらにその周囲に長々と柵が築かれ、人の出入りを厳しく制限していた。
さらに、岡本宮より延々と二十里（約10キロメートル）、幅四町（約360メートル）ばかり、北に向かって何かが柵に覆われて蛇のように伸びている。その内部を窺うことはできない。
山の上より見た者は、その柵の内には巨大な渠（運河）が掘削されている、と言う。地を裂くように穿たれた溝に、幾千の人が群がりうごめいているのを見た、と。
岡本宮の柵門に、土蜘蛛のなりをした乙女が、十数の兵を随えて立っていた。王宮の内に仕える兵はみな、土蜘蛛によってふぐりを砕かれた奴ども。彼らの青白い生気のない貌を一瞥し、

大海人皇子は他の壮丁どもと同じく、背の荷をおろして拝跪した。
「大海人皇子よりの調である」
村国男依は、懐から木簡を取り出し、土蜘蛛の乙女に差し出した。木簡には、調の品々が記してある。細い眼に赤い頬、まだ十六か七と見える乙女は、ちらりと木簡に眼差しを走らせて頷き、手で合図した。兵どもが地面に並べられた荷を、柵の裡に運び始めた。
「裏を」
村国男依は乙女を促した。
「裏？」
「裏にも記してある」
乙女はいぶかしげに木簡を裏返し、しばし墨で黒く記された文字を読み、眉を顰めた。
「しばし待て」
乙女は、兵長に耳打ちし、柵門の裡に消えた。
やがて戻ってきた乙女は、地に膝をつく壮丁どもを見つめて、男依に問うた。
「いずれが……？」
「あれに」
男依はそっと、顎で大海人皇子を示した。乙女はゆっくりと皇子に歩み寄り、耳元でささやいた。
「鏡郎女が、会う」

乙女に導かれ岡本宮の門をくぐった大海人皇子は、思わず眼を見張った。
太極殿の前庭は、ぎっしりと白い玉砂利で敷き詰められ、巨大な池が穿たれ、楽人を乗せた船が二艘、にぎやかな曲を奏でている。池の畔には、いくつかの亭が建てられていた。
大海人皇子は、ひとつの亭に招かれ、椅子に座らされた。
「ここにて待て」
土蜘蛛の乙女は去った。
やがて鏡郎女が現れた。髪を結い上げ、薄紅色の衣に柿色の袴。腰に長剣を堤げているのは昔のままだが、顎のあたりにふっくらと肉が乗り、三十路も半ば、前にもまして威を払っている。
今や鏡郎女は、ただの土蜘蛛の長に留まらない。官職こそなけれ、宝大王の意を受けて政事の多くを司る、事実上の大和の宰相であった。
「しばらくであった」
鏡郎女は、眼を細めて微笑み、皇子に相対して椅子に座した。
「四年になるか」
「額田郎女に会いたい」
皇子は、懐かしげな鏡郎女の声をはねつけた。
「そう記してあったな」
鏡郎女は、微笑をおさめ、男依が乙女に渡した木簡を、袖のたもとから取り出した。
「何故に会いたい？」

再び微笑み、鏡郎女は問うた。
「ただ懐かしいからではあるまい」
覗き込むような鏡郎女の眼差しに、大海人皇子は一瞬、たじろいた。鏡郎女は知っている……どこまでかは分からないが。
「何故かは……」
しわがれた声で、大海人皇子は眼を逸らした。
「じかに、額田に言う」
「讃良のことか」
目じりを下げて驕った笑みを浮べる鏡郎女に、皇子はますます怯み、しかしすぐさま、腹を決めた。
「どこまで知っている？」
皇子の問いに、鏡郎女はすらすらと淀みなく応えた。
「山田寺で降誕会が開かれ、蘇我の一族が集うている。難波にあった有馬皇子は、ここ十日ばかり姿を見せていない。幾人かの邑人が、王族らしい男が山田寺に運び込まれたのを見た。しばし後、大勢の兵とともに、縛られた乙女が二人、やはり山田寺の門をくぐったのを見た。皇子が住まう河辺宮近くの邑では、讃良と木幡が帰ってこぬと民が騒いでいる」
じっと見つめる皇子の眼差しに、鏡郎女は、静かに続けた。
「飛鳥の裡で、吾等が知らぬことなどない」
やはり……。大海人皇子は思った。岡本宮まで筒抜けではないか。

飛鳥ばかりではない、大和の諸々の国や邑には官衙が置かれ、土蜘蛛どもが詰めている。土蜘蛛どもの諜報の才を思えば、その眼をくぐりぬけて、密かに大事をなすことなど、できようはずがない。
「では……」
皇子は問うた。
「そのことを、額田郎女は知っているのか？」
「知らぬ。宝大王にも告げていない。吾一人が知る」
「何故に告げぬ」
皇子は声を荒げた。
「さて何故であろうか」
鏡郎女ははぐらかすように笑った。
「皇子よ、この四年で、皇子も変わった」
「応えよ！」
「かつての皇子ならば、讃良の身をひたすら案じ、しかし自らは何もできず、ひたすら額田郎女にすがっていた。今は、有馬皇子の謀が成るか成らぬか、吾等が有馬皇子の謀に如何なる手を打つか、確かめようとしている。その上で、如何すべきかを決めようとしている」
大海人皇子は、胸を突かれたような心地だった。確かに……ここ三日、その思案に明け暮れていた。讃良や木幡の身を案じるのではなく。
「有馬皇子は、讃良の身と引き換えに、皇子に何かを頼んだ。額田郎女ならばこそ、し得ること

を」
鏡郎女は、冷ややかな眼差しを突きつけた。皇子の四肢が、硬くこわばり、縮んでいくようだった。鏡郎女はすべてを知っている……。
「額田には会わせる」
貌を上げた皇子に、鏡郎女は眼差しを緩め、諭すように続けた。
「額田に何を言うかは、皇子が決めよ。だがその前に」
鏡郎女は立ち上がった。
「見せたいものがある」

岡本宮の宮門から、巨大な渠がまっすぐ北へと向かっていた。幅は二歩（約3・60メートル）、深さは人の背丈の倍ほどもある。
鏡郎女は、渠に敷き詰められた小石を踏みしめ、北へと向かって歩みつつ、傍らの大海人皇子に言った。
「いずれ、この渠には水を引く」
南北に、飛鳥を切り裂くように人口の大河ができる。さらに東西に枝葉を伸ばし、邑々をつなぐ。
「つないで、如何する」
強張った面差しで問う大海人皇子に、鏡郎女は応えた。水は様々な用途がある。
「舟を浮べれば、物や人をより早く運べる。日々の生業で生じる汚物を流すこともできる。ある

いは衣を洗い、田に水を引くこともたやすくなる」
「民の暮らしをよくするための渠というのか」
「然り」
「汝はいつか、この飛鳥を水に囲まれた神仙郷となす、と言うたな」
「言うた……皇子の河辺宮で図面を引いた」
「民の生業のためではなく、大王のための神仙郷であろう。そのために、幾千幾万の民を使役し、諸国を疲弊せしめているのではないのか」
詰問する皇子に、鏡郎女は微笑を貌に浮べた。
「狂心の渠。豪族どもは、そう言いはやしているのであろう？」
澄んだ、まっすぐな眼差しに、大海人は黙した。鏡郎女は続けた。
「この渠が、狂心か否か、まずは己が眼で確かめられよ」
やがて、人のざわめき、多くの石の打ち合う音、岩盤に叩きつけられる鑿や槌の音、それらが重なり合って喧騒の響きが伝わってきた。
大海人皇子と鏡皇女の傍らを、急ぎ足にひとびとが走りぬける。甲冑をまとった土蜘蛛の女兵、百済や新羅の衣服をまとった工人ども、使役に駆り出された半裸の民びとど

飛鳥京跡苑池遺構（奈良県明日香村）

も……。
「気づいたか？」
ふと、鏡郎女が言った。
「何を？」
「彼等の貌……」
大海人皇子は、歩むにつれて増えてゆく、敷石を鳴らして傍らをすぎるひとびとの貌を見た。
衣服は埃（ほこり）を吸って皺だらけ、汗と垢で黒ずんだ貌。
「分からぬか」
鏡郎女は、大海人皇子を見やって微笑んだ。
「いつであったか……皇子は岡本宮を造る興事（おこしつくること）の場にいたな。その折に使役された民と、いま、この渠で働く民と、その違いが分からぬか」
「疾う！」
四人の壮丁どもが走り抜けた。
「陽が落ちる前に……」
かすかに、壮丁の長（おさ）らしい男の言が聞き取れた。振り返ると、四人の男どもは、黒く日焼けした背を見せ、いっさんに走り去ってゆく。
「彼等の貌を見たか」
鏡郎女の問いに、大海人皇子は、すれ違いざまに眼にした男どもの貌を、脳裡で反芻（はんすう）した。口を半ば開き、凄まじい速さで走っていた。喉仏が激しく上下していた。苦しげにゆがんだ面差し、

その眼は……。
皇子は、足を止めた。そう……、四年前、岡本宮の造営の興事に駆り出された民は、鞭（むち）を持った兵に怯え、その眼は曇っていた。
いま、通り過ぎた男どもの眼には、何かをなさねばらないという、光のようなものが宿っていた。
「分かったようだな」
鏡郎女は、大海人皇子の腕を叩き、大股に歩み始めた。

まず、耳に飛び込んできたのは歌だった。
次々と運び込まれる敷石を、幾百の半裸の壮丁どもが、両手で持ち上げて胸に抱え、掘られたばかりの荒々しい地肌を見せる渠の底に並べていた。

この石は
飛鳥の北なる
石上（いそのかみ）の
乃楽（なら）の山なる
木々を踏み分け
掘り出し石ぞ
いざ敷けや

石上の石を

切り立った渠の両壁の上から、歌とともに、間断なく袋に詰められた敷石が縄に縛られておろされている。

石上は、飛鳥より北東へ二十里（約11キロ）。良質の砂岩を産することで知られている。

「あれは、石上の民」

石を運ぶ壮丁どもを眺めつつ、鏡郎女は言った。

「あれは、熱田の民」

眼差しを転じた先に、鋤をふるって岩盤を突き崩し掘り進む男どもの群れがあった。

この鋤は
熱田の鍛人
金山の
鉄を採りて
炉に焼きて
叩き延べ
鍛えし鋤ぞ
いざ掘れや
熱田の鋤

熱田は尾の国にあり、製鉄の技で知られていた。

「彼らがうたっている歌」

鏡郎女が、立ち尽くす大海人皇子を見上げて問うた。

「誰が作ったか、分かるか」

その名を口にしようとして、唇を閉じてしまった皇子に、鏡郎女は微笑みを浮かべ、続けた。

「歌の力……。まさに、歌の力。歌えば、躯の疲れも心の荒みも癒される。この渠の興事が始まった最初の年、病で、逃げようとして、崩れた石や土に敷かれて、百を越える民が命を落とした。次の年はその半ば、次の年はさらにその半ば、今年はまだ一人も死んでいない。何故か、分かるか？」

鏡郎女は言った。

ここでは、熱田と石上の民が、互いの地で産した鉄や石で、競い合っている。競い合うことが彼らの励みになる。一日の作業が果てた後は、同じ飯を食い、時には同じ酒を飲み、互いの郷のことを語り、心を通じ合わせる。競うことと、和すること。この相反する二つがほどよく調和し、使役された壮丁どもの心を荒ませず、作業は早く進み、逃げようとする者は稀になった。

「それだけではない」

生き生きと働く民。万を数える壮丁を徴発され、諸国は疲弊の極みにあるとばかり聞いてきた大海人皇子は、なおも、疑わしげな面差しを消せないでいる。鏡郎女は硬く強張った大海人皇子を見やり、ひとつ息をついで言った。

「来よ」
渠の左右のところどころに、縄梯子がおろされていた。鏡郎女は階に足をかけ、よじのぼった。
縄梯子をよじのぼった先は、ひろびろと均された原に、数多くの苫屋が建ち並んでいた。草葺、板張り、さまざまな材で組み立てられた屋からは、米を炊く、あるいは炭を焼く煙が立ち昇っている。
ひとつの苫屋は、高さ十尺（約3メートル）、五歩（約9メートル）四方の板張りで、その内部はむっとする熱気に満ちていた。中央に、長方形の石積みの炉が組まれ、その周囲を十四人の壮丁が囲んでいる。彼らが足で踏む鞴から送られる気が、炉で焚かれる砂鉄を熱し、さかんに山吹色の炎を巻き上げていた。
「踏鞴場である」
鏡郎女が指差す先に、東国ふうの衣をまとった老人が、腕組みし、しわがれた声で壮丁どもを指揮していた。
「あれは、百済の鍛人」
製鉄技術は、やはり三韓のほうが優れている。大和の踏鞴場を百済人や新羅人が差配しているのは珍しいことではない。だが……と鏡郎女は続けた。
「鞴を踏んでいる壮丁は、七つの国から徴した」
大和の北なる越、西なる吉備、出雲、大伯、さらに瀬戸の海を越えた筑紫や伊予、肥から徴発した民が二人ずつ、一つの炉を囲み、百済人の下、鞴を踏んでいるのだ。

大海人皇子は問うた。
「何ゆえに」
遠く離れた筑紫と越の民では、話す言葉が違う。これまで遠国より民を使役する場合は、なるべく同じ地の者の集団を単位とするのが通例であった。言葉や慣わしが共通しているほうが、まとまりやすい。
鏡郎女は応えず、踏鞴の苫屋を出た。
次に入った苫屋には、病や傷で伏せる者が数十人。やはり百済人の医人のもと、様々な郷から来た民が、看護に当たっていた。
「百済の医術だけではない」
鏡郎女は言った。大和の様々な地には、それぞれ、薬草の用い方など、独自の療法がある。
「分かるか」
唇を引き締め、鋭く覗き込む鏡郎女の眼差しに、皇子は、苫屋の裡を改めて見回した。
土器に乗せた薬草を細かく砕く者、それを釜で煮詰める者、患者の身を洗い清める者、一糸も乱れることなく動いている。
鏡郎女は外に出て、指差しつつ言った。
この苫屋では、十の国より来た乙女ら三十人が、布を織っている。かの苫屋では、尾の国の鍛人が、十八の国の民に鋤を造らせている。
さらに、苫屋の外には、様々な菜や草を植えた畠が広がっていた。使役された民どもが持ち込んだそれぞれの国の種や苗を植え、育てている。

農、織、工……、様々な地の優れた技術が、ここには集積されている。その技術を、万を越える民がここで学ぶ。

「使役された壮丁は、一年の後にはそれぞれの郷へと、ここで学んだ術を携えて、帰ってゆく」

それが、大和を隅々まで豊かにする……。鏡郎女は口を噤み、大海人皇子の眼を覗き込んだ。

「それで」

皇子は問うた。

「諸々の国は、豊かになっているのか」

「なっている」

当たり前のように頷く鏡郎女に、皇子は重ねて問うた。

「豪族どもは、何故にそのことを言わぬ」

鏡郎女は微笑んだ。

「民は豊かになったが、豪族どもの蔵は豊かになっていないからだ」

かつては、邑々がもたらす収穫は、すべて豪族どもの蔵に収められ、その一部が税として大王家に貢された。今は違う。国々に派された官人――その多くは土蜘蛛であった――が直に民より税を集め、大王家に収める。豪族どもには、その家格に応じて大王より食封を給付する。

既得の収税の権を奪われた豪族どもが、宝大王の施政を批判するのは当然であろう。民に対しては、大王家の理不尽を言い立てて多く税を集め、大王家に対しては、飢饉の旱魃のと理由をつけて少なく貢する。その差を掠めて財を蓄える手立てを失ったのだから。

「では」

大海人皇子は足を止め、まっすぐに鏡郎女を見据えた。

「何故に汝は大和の民を富ませ学ばせ、その傍ら、三千の民を兵となし、北の蝦夷へと派するのか？」

鏡郎女は、いったん唇を開き、すぐに閉じた。まっすぐに皇子に注がれていた眼差しが、一瞬、地に伏せられた。その一瞬を突いて、皇子は言を重ねようとした。

そのとき、不意のざわめきに、皇子は背後を振り返り見た。

歌声とともに、数十人の壮丁が、筏のように組んだ丸太に巨大な岩を乗せ、結び付けられた荒縄を肩に掛けて曳きつつ、こちらに向かって進んできた。

岩の上には、竹で編んだ籠を背にした乙女が一人、清かな声で歌っていた。

この御酒を
醸みけむは
人に非ず
猿が醸みて
深山の
木の洞に貯めし
この御酒を
歌いつつ

舞いつつ
あやにた愉し
この酒

その歌に和して、壮丁どもが歌い、四方に木霊した。

あやにた愉し
この酒

それぞれの苫屋から人が駆け出してきて、岩を運ぶ筏を嬉しげに取り囲み、和する歌の響きはさらに増した。

あやにた愉し
この酒

「よし！」
岩の上の乙女が叫んだ。巨岩を運んでいた壮丁どもは一斉に足を止めた。乙女は身軽に岩を駆け下りた。
乙女を囲む人垣を掻き分けて進み出た鏡郎女に、乙女は、

「還ったぞ」
と笑った。
年の頃は、十一か二か、小柄だが伸びやかな四肢を、水色の袍に橙色の袴で包み、髪を男童のように結い上げている。
「鏡郎女よ」
軽く背を曲げて礼をする鏡郎女の眼の前に、背にした竹籠を置き、息を弾ませて乙女は問うた。
「郎女は、猿が造るという酒を知っているか」
「猿が酒を？」
「然り」
乙女は、竹籠の縁に顎を乗せ、眼を見開き、瞳をしきりと動かした。
「石上の山中には、猿が造る酒が、木の洞に溜めてあるという。山の猟人がたまにそれを見つけるそうだ」
「まことの酒が？」
「然り、まことの酒。飲めば酔い、歌い舞いたくなる」
大海人皇子は、総身を強張らせ、乙女を見つめていた。
その貌、その腕、身振り、声音。すべてが同じであった。
亜那……。

鏡郎女は、大王以外の誰にも拝礼しない。大王家に連なるでもなく、いずくの豪族の出とも知

れず、ただ、土蜘蛛を束ねる長というだけで、人々は彼女を畏れ、彼女は誰をも敬わない。
ただ、亜那――かつての額田郎女――に似た乙女に、鏡郎女は軽くではあっても拝礼した。ならば皇女(ひめみこ)か？　亜那に似た皇女といえば……。
大海人皇子は拳を握り締め、湧き上がる情を押さえつけるように己が身を抱いた。
十市皇女(とおちのひめみこ)……。
今は十一になっているはず。
「されど郎女よ」
耳に心地よく響く清かな声で、十市皇女は続けた。
「吾は石上(いそのかみ)の民に問うた。猿が酒を造るものか、誰かそれを見たのか、と」
微笑んで頷く郎女に、十市皇女は身振り手振りを交えて言った。
「見た者はいないという。されば誰がその酒を造ったか。吾は考えに考えた。考えて答えを得た。郎女よ、酒は如何にして造る」
当時の酒は、生米を未通女(おとめ)に噛(か)み砕かせ、壺(つぼ)に収める。未通女らの唾液が作用し、発酵(はっこう)する。
「然り、然り」
十市皇女は、深く何度も頷いた。
「されば、人ではなく、猿が噛めば如何？」
猿が山中の樹に登って得た木の実を齧(かじ)り、すべては齧らず冬の蓄えとして木の洞に隠しおいたものが発酵し、酒になったのではないか。
「すなわち、猿ではなく、人が木の実を噛んでも、酒になるのではないか」

十市皇女が背負っていた籠には、溢れるばかりに、梅や苺(いちご)、橙(だいだい)が入れられていた。
「郎女、織女(おりめ)を十人、借りるぞ！」
言うなり、十市皇女は竹篭を背負い、布を織る苫屋に向けて駆け出した。
「皆、しばし待て。やがて木の実の酒を進ぜる！」
その叫びに、壮丁どもはわっと歓声をあげ、皇女の小さな躯(からだ)は人垣に消えた。
鏡郎女が振り返って大海人皇子を見た。皇子は貌を背け、俯いた。溢れそうな涙を懸命にこらえた。
十市皇女は、壮丁のなりをした父なる皇子を、一顧だにしなかった。母なる額田郎女とともに大王家に召されて五年、慧(さと)く、心根の明(あけ)らかな乙女に育った。すでに、父の貌など忘れていよう。
「十市皇女は」
そっと皇子に寄り添い、優しげな声音で鏡郎女は言った。
「ここで働く民どもの慰め。皆、皇女を慕う。時には酒を振舞い、自ら歌い舞う」
皇子の脳裏に、伊勢で、皇子や舎人どもに囲まれ、古(いにしえ)の物語を歌う亜那の姿が蘇った。十市皇女も、あのように歌い、あのように舞い、あのように語るのだろうか。
「皇子よ」
鏡郎女は面差しを引き締め、問うた。
「この渠が狂心(たわぶれごころ)の渠か否か、得心(とくしん)がいったか」
皇子は応えなかった。鏡郎女はしばし皇子を見つめ、やがて口を開いた。
「民が喜んで働き、様々な技を学び、それを諸国に持ち帰り、大和は隅々まで潤う。この仕組み

を考えたのは……」
ひとつ息をつぎ、鏡郎女は言った。
「額田郎女」
眼を見開いた皇子に、鏡郎女は続けた。
「額田郎女ほど、民の心を知る者はいない。宝大王も、郎女の献策には随いたまう。おもしろいとは思わないか」
かつては、豪族でなければ大王に策を献じることなどできなかった。伊勢の浜に捨てられていた乙女が、大和を変えようとしている。
「まして女が……。大王家に連なる皇女ならばともかく」
そう笑って、郎女は問うた。
「さて……汝は、如何する」
「如何とは？」
「額田郎女に会うて、汝は如何、言う？」
黙して応えぬ皇子に、郎女は言った。
「宝大王は老いた。それは汝もよく知っていよう」
皇子の寝屋にて胸の紐を解き、衣をはだける宝大王の、醜く老いた四肢が脳裏に浮かんだ。思わず貌を歪める皇子に、鏡郎女も、穢れを払い清めるように、顎のあたりで手を動かした。
「たとえ、宝大王が崩御したまい、別の皇子が大王の御位に即いても、吾ら土蜘蛛の意を蔑

ろにして政事は動かせまい」
「大王など、誰でもよいと？」
皇子はしわがれた声で言った。
「誰が大王であろうと、まことに大和の国を動かす者は、汝であることに変わりはないと？」
「吾が？」
鏡郎女は首をかしげてみせた。
「今、言うたばかり。宝大王は、額田郎女の献策にはすべて随う、と。大和を動かしている者を一人挙げるとすれば、むしろ、吾ではなく額田郎女である」
その言のそらぞらしい軽さに、皇子は声を荒げた。
「汝は、さきほどの吾の問いにも応えなかった。何故に、蝦夷に三千の兵を派する？　それもまた、額田郎女の策か？」
石のように黙す鏡郎女に、皇子は言い募った。
「民の心を知る郎女が、さらに民に重荷を強いる軍など、献策するはずもない」
鏡郎女は眼差しを逸らした。
「たとえ、額田郎女が宝大王を崩御せしめ、有馬皇子が大王位を継いでも、汝は変わらず国を動かす。そうであろう」
「大王位を継ぐべき皇子は……」
鏡郎女は静かに口を開いた。
「有馬皇子ただ一人ではない」

「他の皇子？」
大海人皇子は、虚を突かれ、それでも荒い声音を変えなかった。
「まさか、葛城皇子……」
汝が追い落とした葛城皇子を、と言いかけて、大海人皇子は口を噤んだ。
葛城皇子は、豊日大王に背き、百官を随えて飛鳥に王都を遷し、自ら大王位に即こうとした。
その際、土蜘蛛にはいっさい謀を漏らさなかった。己が大王位に即いた後、鏡郎女を長とする土蜘蛛が勢力を得ることを希まなかったからであろう。
だが、鏡郎女は宝大王を奉じ、豊日大王のふぐりを砕いて葬り去り、葛城皇子の謀をもともに打ち砕いた。以来、葛城皇子は難波に籠り、その噂は聞こえてこない。だが、あの葛城皇子が、たやすく大王位への野望を諦めたとは思えない。あの皇子ならば、再び土蜘蛛と組んで、大王位を得ようと画策しても、不思議はない。
黙した大海人皇子に、鏡郎女は微笑んだ。
「汝とて、皇子ではないか」
……やがて、日輪の女神の国を、継ぐ者……。
忘れていた、母なる稗田阿礼の声が、皇子の脳裏に木霊した。

暗くなるまで河辺宮に還らぬと、あらぬ疑いがかけられよう。
鏡郎女に促され、敷石を踏んで岡本宮へと戻り、柵門を出ると、舎人の村国男依が壮丁どもとともに、気遣わしげに待っていた。

「行くぞ」
男依の声とともに、大海人皇子は壮丁どもに混じり、歩き始めた。
ふと振り返ると、そこには長々と続く柵があった。その向こうに、額田郎女と十市皇女がいる。
ただ、いるのではない。葛城皇子や中臣鎌子、蘇我鞍作らが策を練り、謀を弄び、多くの血を流してまでして、なそうとしたこと――大和を思うままに動かすことを、額田郎女と十市皇女は、誰をも陥れず、血を流すこともなく、その歌の才でなしている。
吾が、無為と荒淫の日々を送っている間にも……。
「皇子」
見れば、傍らに、先頭にいた村国男依が、もの問いたげな面差しで、並んで歩いている。
「鏡郎女に会った」
他の壮丁に聞こえぬよう、声を潜めた皇子に、男依は問い返した。
「で、何と？」
「額田郎女には、いずれ会わせると」
「いずれ？」
それでは、讃良や木幡の身が……と、眉根を顰める男依に、皇子は言った。
「今宵、かの三人に酒を振る舞え」
蘇我赤兄が、監視役として河辺宮に住まわせた物部鮪、守大石、塩屋小代のことである。
「宴が盛んになった折を見て、海部石床を吾が寝屋へ」
村国男依は頷き、皇子から離れて列の先頭へと戻った。

今は待つしかない……。

青々と道を覆うばかりに茂った春草を踏みつつ、皇子は思案をめぐらせた。

鏡郎女は、有馬皇子の息のかかった豪族どもが、大海人皇子を監視していることを承知していた。当然、額田郎女もそれを知っていよう。

額田郎女は、皇子に会うべく、かの三人の眼を盗み、無事、皇子の寝屋に忍んで来よう。それが今宵か、明日か、明後日か。その間に、有馬皇子が讃良や木幡に危害を加えることはよもやあるまいが、現れた額田郎女に、皇子は何を言えばよいのか。

讃良らを無事に還してもらうためには、手は二つ。有馬皇子に随い、額田郎女をして宝大王を死に至らしめるか。あるいは、土蜘蛛の手を借りて讃良の居場所を突き止め、無理やりに奪い返すか。危険な手だが、土蜘蛛ならば、できぬことはない。

しかしその後は？　もし、土蜘蛛の助力で讃良らを奪い返したならば、有馬皇子は必ず、報復の兵を差し向けよう。河辺宮の近くには、物部鮪らの兵が潜んでいよう。皇子が裏切ると同時に、彼らは必ず河辺宮に攻め込んでくる。これを防ぐだけの兵はいない。

とすれば、讃良を奪い返すと同時に、宝大王の詔を得て、有馬皇子や蘇我赤兄らを謀叛の罪に問い、誅戮する他ない。

だがそうなれば？　宝大王の御稜威は弥増そう。国や民を思えば、有馬皇子よりも、額田郎女の献策を容れる宝大王をこそ、奉じるべきであろう。

しかし……。

一方で、大海人皇子は、有馬皇子の謀が成功することを、心のどこかで望んでいることに気づ

いていた。

宝大王が崩御すれば、あの老醜に蝕まれた躯とのまぐわいから逃れられる。

さらに、額田郎女が大王宮から解放され、また、思うままに逢える日々が戻ってくるのではないか。

その日の夜。

「確かに」

遠くから響いてくる酒宴のざわめきに眼をやりつつ、舎人の海部石床は言った。

「五年前には、使役されて再び伊勢に還ってくることのない民は少なくなかった。しかしここ一年二年、還って来れなかった者はごく僅か」

彼らが飛鳥の興事で身につけた技で、邑々の暮らしが潤っているのも事実。伊勢を治める海部の一族である石床は、そういった。

鏡郎女の言に偽りはなかったようだ。頷く大海人皇子に、石床は重ねて言った。

「しかし、邑の民の生業が豊かになっても、そのぶんの税はすべて、官衙に収められ、吾ら海部が潤うわけではない。海部の者は、ただひたすら、官衙のために、税を集める等、雑役を手伝うより他、何の権能も与えられていない」

かわって、使役から還った民のうち、秀でた者が選ばれて官衙に勤め、旧来の豪族よりも重く用いられているという。

苦々しく俯く石床に、皇子は問うた。

「海部が、官衙と諍うことは、あるのか？」
「皇子の命に随い、ひたすら堪えている」
伊勢をはじめ、諸国に建てられた官衙を動かしているのは、鏡郎女の意を受けた土蜘蛛。その恐ろしさを知る皇子は、石床を通じて、決して逆らわぬよう、かつて己を育んでくれた海部に伝えてあった。
しかし……、と石床は続けた。
他の国では、官衙に逆らった豪族の長が行き方知れずとなり、数日の後、衣をすべて剥がれた無残な姿で、山中にうち捨てられていた。彼のふぐりは、二つながら砕かれ、陽物を切り取られ、口に含まされていたという。
土蜘蛛らしい酷い仕様よ……。かすかに怖気を覚えつつ、一方で皇子はこうも思った。
はるか旧より、諸々の国を治めてきた豪族の多くは、民との結びつきが強く、彼らを護ることに心を砕く。一方で、既得の権を盾に、ただ、民を搾り、財を蓄えることを専らにする豪族もいる。彼等を排し、秀でた民を登用するのも一つの理ではある。
「分った」
大海人皇子は言った。
「汝も、酒宴に戻れ」
海部石床は拝礼して立ち上がり、こちらに背を向け、ふと足を止め、踵を返して膝を突いた。
「皇子よ」
その眼が、悲しげに見開かれていた。

「物部も、守も、塩屋も……」
有馬皇子が監視に送り込んだ三人の名を挙げ、石床は訴えた。
「宝大王の御世になって後、収税の権を官衙に奪われ、その民を、興事に軍に徴され、その蔵はますます乏しくなり、思うまま一族を養えぬ有様」
それ故に、有馬皇子の杜撰な反逆の謀に加担した。そう言いたいのであろうと、皇子は察した。
「彼等を」
大海人皇子は問うた。
「哀れと思うか」
石床は俯き、応えなかった。黙すことで、彼らへの共感を示した。
「その事、覚えておく」
女孺に命じ、寝屋に酒を運ばせよ、と皇子は命じた。石床は再び拝礼し、去った。

おそらく……。
大海人皇子は思った。
物部や守や塩屋だけではあるまい、宝大王の御世を覆そうと望んでいるのは。
飯豊の女王の御世より豪族を束ねてきた蘇我。その長となった赤兄が、彼らの声を受け、有馬皇子の謀叛に加担したのも、故なきことではない。
豪族どもが、それぞれの差配する国を治め、大王を戴き、緩やかに結びついていたのが大和であった。蘇我鞍作が板蓋宮で誅されて後、豊日大王であれ、葛城皇子であれ、宝大王であれ、大

王家ただ独りが大和の隅々をも差配する国に、変えようとしている。
何故に？
国を変える。政事を改新する。
なんのために？
女孺が、酒の入った瓶と杯を持って入ってきた。
瓶と杯を差し出し拝礼し、すぐに退出ろうとする女孺に、皇子は問うた。何故に問うたのかは分らない。ただ、己が大和の行く末を左右する立場にあることに怯え、言を交わさずにはおられなかった。
「汝は、いずくより来た」
尾の国……。女孺は貌を伏せたまま、かぼそい声で応えた。
「家の者は息災か？」
さらなる問いに、女孺はますます身を硬くし、かすかに頷いた。
「近頃、尾には変わったことは起きたか」
女孺はやや首をかしげ、しばし思案していた。確か、七日ほど前に、新たに宮に入った女孺であった。大王家に連なる皇子を前に、礼を失さぬことしか頭にないのであろう。
皇子は問いを変えた。
「汝には兄はいるか」
女孺は頷いた。
「汝の兄は今、何をしている」

かんが……、と女孺は、消え入るような声で呟いた。
「官衙か？」
女孺は頷いた。
「官衙に徴されたのか？」
皇子はさらに問おうとして、女孺が先に言った。
「兵として徴され、今、百済の僧より、百済の言葉を習っていると」
百済の言葉を……。
皇子は悟った。
やはり宝大王は、近いうちに三韓に兵を送ろうとしている。海を越えて軍を興すには、その地の言葉を解する兵が多ければ多いほど、策を立てやすい。蝦夷への派兵は、やはり三韓出兵を見据えた調練なのだ……。
「分った。退がってよい」
平伏し、身を起こすや急ぎ足で去ってゆく女孺の後姿を見送りつつ、大海人皇子は、大王宮で、宝大王をはさみ、額田郎女と鏡郎女がせめぎあっている気配を覚えた。
迷いが消えた。
二人のうち、いずくかを選ぶならば、鏡郎女ではなく、額田郎女。まず額田郎女に問い、その応えるままに動こう。
その夜は、額田郎女が現れぬまま、明けた。

目覚めて寝屋を出た大海人皇子は、宮の中庭に出た。植えられた躑躅が、紅色の花弁を、華やかに広げていた。

咲き誇る躑躅の花のなかを、女嬬が一人、腰を曲げて雑草を抜いていた。

「みごとに咲いたな」

そう言うと、女嬬は貌をあげ、皇子に気づいて拝礼した。昨夜、酒を運んできた女嬬であった。

「その躑躅、いくつか摘んで、水を浸した土器に挿し、吾が寝屋に運んでくれるか」

女嬬は頷き、貌をあげて微笑んだ。額に、脂を含んだ吹き出物が二つ三つ、赤く浮き出ていた。讃良より少し下、十市皇女より少し上か。

庭から出て、屋に戻ろうとして、ふと、背後を窺うと、監視役の守大石が、女嬬に歩み寄り、なにごとかを問うているのが見えた。詰め寄る大石に、女嬬は不思議そうな面差しで、応えている。何を聞かれた？　躑躅を摘めと。躑躅？　その意味するところが分らぬまま、守大石は眉根をひそめ、首を傾げつつ庭を去った。

女嬬は再び、腰を曲げて、躑躅を根から摘み始めた。

政事とは、彼等を守るためになされるべきではないか。大海人皇子は、その背にのしかかった重いものが消えて、不意に身が軽くなるのを覚えた。

今宵は来るであろう。

夜が訪れ、ほのかな灯火が照らし出す土器に活けられた躑躅を眺めつつ、大海人皇子は端座しつづけていた。

床に敷かれた木の板をかすかに叩く音がした。民や貧しい豪族どもは、地を掘りくぼめ柱を建てた、竪穴の苫屋に住んでいる。王族や富める豪族のみが、地に幾十本もの柱を立て、その上に板を並べる高床の屋を有している。

河辺宮も高床で、監視の眼を盗めば、床下に潜める。

今宵はそこから来たか。

「額田か」

皇子は微笑み、あらかじめ釘を抜いておいた板を外した。

額田郎女が、笑みを浮べつつ、外した板の隙間から貌を出した。

すでに齢二十六。

「この五年」

その唇が動き、言葉が漏れたとき、郎女の面差しから微笑が消え、切なげに崩れた。

「皇子のことを思わなかった夜はない」

皇子の腕をかい抱き、肩に貌を押し当て、額田郎女は声を忍ばせて嗚咽した。

積もる話をする暇はなかった。

「有馬皇子の意を受けた者が、この宮の裡にいる」

皇子は、すがりつく額田郎女の背をしばし撫で、耳元で囁いた。

「汝が意を聞かせてほしい。吾は汝に随う」

郎女が、貌を挙げた。頬に涙の痕が残っていたが、眼はまっすぐに皇子の眼を射抜いていた。

「皇子に問う」
郎女は声を低めた。眼の輪郭が、五年前よりもさらにくっきりと深く刻まれていた。ふっくらした頬の脂が落ち、美しい目鼻立ちを、より鮮やかに際立たせている。
「讃良を救うことと、大和の行く末と、いずれを重く考えるべきか」
「汝は」
皇子の腹は決まっていた。
「如何、思うぞ」
「讃良を救うは易い」
郎女は、眦(まなじり)を引き締めた。
「であれば」
皇子は言った。
「讃良を救った後、大和を統(す)べるべきは誰か。汝が望むところを聞きたい」
郎女は軽く頷き、問いを待った。皇子は、ひとつ息をして、問うた。
「有馬皇子か」
郎女は首を横に振った。皇子はさらに問うた。
「宝大王か」
郎女はしばし眼を伏せ、やがてきっぱりと言った。
「否」
「葛城皇子か」

「否」
「では誰が大和を統べる」
「皇子と……」
額田郎女は、深く息を吸い、静かに、しかし力のこもった声音で言った。
「吾」
皇子は瞬(まばた)きもせず、郎女の眼に見入った。亜那(あだ)と呼ばれた乙女の頃と同じく、黒く澄んだ瞳には、毫(ごう)も曇りや揺らぎは見えなかった。
「吾と、汝とで……」
かすかに震える声で言う皇子の腕をしっかりと掴み、郎女は繰り返した。
「然り。吾と皇子とで」

宮の裡で、高笑いの混じったざわめきが響いてきた。
今宵も、舎人どもが、有馬皇子が監視に送り込んだ、守、物部、塩屋の三豪族に、酒を振舞っている。彼等の眼を、少しでも皇子の寝屋から遠ざけるためではあるが、海部大石のように、没落する豪族の苦しさに、情を寄せる者もいる。
「郎女よ」
皇子は、郎女の躯をきつく抱きしめた。
「知っていよう、吾は鏡郎女とともに、渠の興事を見た。汝が策と十市皇女によって、使役された民は喜んで働き、諸国が次第に富みつつあることを知った」

「然り」
郎女は、皇子の胸に貌をうずめて言った。
「吾が献策にて」
「汝がいれば、気弱な吾でも、大和の民に、さらに豊かな生業をもたらせるように思う」
「然り」
「さらに……既得の権を奪われ、貧しくなりゆく豪族どもにも、汝ならば、恵みをもたらせよう」
「吾独りではなく……」
郎女は、貌を上げ、潤んだ眼を向けた。
「皇子も、心を尽くして政事に当たれば、それも叶うやも」
「されど……」
皇子は、しばしその名を出すことを躊躇った。
「吾は恐ろしい」
「何が恐ろしい」
郎女が訝しげに問うた。
「汝は」
皇子の喉が渇き、声はしわがれた。
「鏡郎女を敵とすることが、できうるか？」

大海人皇子は、朧げに感じていた事が、次第にくっきりと見えてきたように思った。

真の敵は、鏡郎女。まず、鏡郎女を排さぬことには、山背皇子や蘇我鞍作の横死以来、治まることなく続いてきた大和の内紛が終息することはないであろう。
鏡郎女は、人の命を奪うことに長(た)けた土蜘蛛を操り、思うまま策を弄し、大和の政事を壟断(ろうだん)してきた。
彼女が、大和を如何なる方向へ導こうとしているのか、口には出さぬが、それが、国や民を安らかにならしめるものではないことは、明らかだった。
さらなる血と呻きと混乱。
しかし……。
かつて、鏡郎女は言った。
額田郎女の眼は、清く澄んでいる。
その手を穢したくない、と。
そもそも、大王宮に采女(うねめ)として献じられようとして抗い、大王の使者を殺した額田郎女を救ったのは、鏡郎女だった。土蜘蛛としてではあっても、それなりに慈しみ、額田郎女が十市皇女を産むや、皇子の元へと還してくれた。
はたして、鏡郎女を、額田郎女は、如何に思っているのであろうか。
不安げに見つめる皇子の懐から身を離し、かすかな微笑をつくり、額田郎女は居住まいを正した。
「皇子が、鏡郎女と戦うというならば」
郎女の唇の端がつりあがり、一瞬、笑みのようにも見えた。

「吾もともに戦う」
皇子の胸に、熱い震えが湧き上がり、四肢を満たしていった。
「吾とともに？」
「然り」
額田郎女は、皇子の腕を掴んだ。
「皇子とともに」

何故に、鏡郎女が、三韓に兵を派することにこだわるのか、吾は知らぬ。
額田郎女は言った。
三韓の地は、鉄を産する。この大和の数倍の鉄を。大和は長年、時に外交にて、時に軍の力を以って、三韓の地からより多くの鉄を得ようと努めた。
しかし……。額田郎女は、首をかしげて溜息をついた。鏡郎女が三韓攻めを急ぐは、ただ鉄のためとは思えない。
そもそも。大海人皇子は問うた。鏡郎女はいずくの豪族の出ぞ。
わからない。額田郎女は首を振った。それが分かれば、鏡郎女に抗する手立てが見つかるやもしれぬのだが……。
郎女よ……。皇子は言った。有馬皇子には何と言えばよい？
吾が……。郎女は微笑んだ。有馬皇子の意を諾したと言えばよい。
宝大王を弑殺し奉るのか？

そう有馬皇子に伝えよ。ただし、すぐに殺すのではない。四肢を蝕む毒を、少しずつ、食に混ぜる。この年のうちに、大王は必ず崩御する、と。
では……。皇子は面持ちを強張らせて問うた。この年のうちに、大王を死に至らしめると？
否。郎女は首を振った。宝大王を殺してはならない。
何故に？　そう問う大海人皇子に、額田郎女は、ふと眼差しを下げて呟いた。
大王が、夜、密かにこの河辺宮に御幸していることは知っている。
郎女は、再び、大海人皇子にしがみつき、烈しく腕を動かして、かき抱いた。その背に爪を立てて食い込ませながら、郎女は続けた。
その事を責めはしない。ただ、大王は御子を欲している。大海人皇子の胤になる御子を得て、次の大王となそうと。
吾が子を？
然り。
では汝は……、大海人皇子は、口を塞がれつつ、眼で訴えた。
吾が、宝大王に御子を産ませればよいと？
その御子を、大王の御位に即けよ、と？
「大王の御意は……」
額田郎女は、眼を潤ませつつ、唇を曲げて僅かに笑みを作った。
「もし、御子が生まれなければ、大海人皇子に、大王位を継がせようと」
故に、宝大王には、しばらく生きていてほしい。

しばしの抱擁の後、額田郎女は、身を離し、まっすぐに皇子を見据えて言った。
「宝大王が今、崩御したまえば、次の大王に推されるべきは、三人」
大海人皇子、有馬皇子、そして……。
「葛城皇子」
あ……。叫びそうになる皇子の口を、郎女は手で塞ぎ、耳元でささやいた。
「恐るべきは、有馬皇子に非ず。葛城皇子」
しかし、葛城皇子は、難波で逼塞し、その噂も聞かぬ。有馬皇子は、この度の謀叛に葛城皇子が加担していると言っていたが……。そう言おうとする皇子の口を手で塞いだまま、郎女は続けた。
「葛城皇子と、鏡郎女が再び手を組めば、誰にも止められない」
この二人が手を組めば、如何なことになる？
「分からぬ。分からぬが故に恐ろしい」
郎女は続けた。ただ、三韓を攻めるには留まるまい。おそらく、三韓を平らげ、その向こうにある唐までをも服属せしめようとするかもしれぬ。そのような大軍（おおいくさ）に、今の大和は、とても耐え得まい。如何にして、それを阻むか。吾にも、未だに策は見つからぬ。されど……。
「とにかく皇子は、有馬皇子をして、年のうちに宝大王が必ず崩御するものと信ぜしめよ。宝大王の崩御は、鏡郎女や葛城皇子にとっても、意に適（かな）うはず。そう思わせておいて、その間に吾は

まず、鏡郎女の出自を探る。出自を探れば、鏡郎女の真意も分かろう。あるいは、その弱みを見出すこともできよう。まず敵を知らねば、策の立てようもない」
口を塞がれたまま、皇子は、眼で頷いた。
「皇子よ」
額田郎女は、皇子の口から手を離し、微笑んだ。
「皇子はいずれ大王の御位に即（つ）く方と、養い母たる稗田阿礼は言った」
吾は、阿礼の言を信じたい……。

唇を重ね、互いの舌をまさぐりあい、そして、額田郎女は去った。
大海人皇子は、しばし床に座して動かず、己が身を両腕で抱きしめ、沸き起こる感情を抑え付けていた。
五年ぶりの再会は、求めていたまぐわいなしに、終わった。
しかし皇子は、何よりも求めていた言葉を得た。
共に戦う。
共に……。